

丸栄百貨店の画廊と展覧会

大島 歩、副田 一穂

本稿は、2019年度に関係者より受贈した丸栄画廊《スクラップブック》80冊(1959年～2018年、所蔵作品登録番号JM201900014000)に貼付された展覧会の案内状等の資料を整理し、丸栄百貨店内の画廊や催事場等における展示事業についてまとめたものである。

受贈した80冊は、以下の3種に分類できる。

①「スクラップブック」および「案内状綴り」：57冊

背表紙に手書きで年記がある。大半は丸栄内で開催された展覧会の案内状だが、加えて即売会の案内状、画集や版画の販売広告、レセプションの案内状、価格表、月の催し(1992[平成4]年4月以降)、季節の挨拶状など雑多な資料も含む。

②「催事案内状」：18冊

丸栄内で開催された展覧会の案内状や即売会の案内状、レセプションの案内状、価格表等のうち、工芸分野に属する催事資料のみ分離してまとめたもの。

③「画廊企画展」：5冊

丸栄美術部または丸栄百貨店専務・美術担当宛に送られてきた他所の展覧会の案内状等。

ただし①のうち27冊目に当たる「案内状綴り平成2.1～(日本橋高島屋美術部)」は例外的に、日本橋高島屋やなんば高島屋の主に1990年～95年頃の展覧会案内状やスケジュールを集めたものである。丸栄は1970年2月から高島屋と業務提携しており、画廊としても「東京の三越や高島屋の美術部長にも何かと教わったり」¹する関係であった。

愛知県美術館では、受贈後の2021年度から資料の整理および調査を開始し、現在までに①のうち37冊について作業が完了した。本稿では、これらの調査結果を踏まえつつ、画廊・展示スペースの変遷と展覧会の傾向について報告する。また整理したデータは本稿の後にリスト化して掲載する。

画廊・展示スペースの変遷

丸栄百貨店の建物は移転、改築、増築等を繰り返しており、画廊や展示スペースもそれに合わせて場所を変えている。以下に変遷の概略を記す。

丸栄百貨店は、十一屋(1615[元和元]年創業、1915[大正4]年栄町に移転)と三星^{みつほし}(1937[昭和12]年設立)が1943(昭和18)年に合併して栄に開業し、2018(平成30)年6月30日に閉店してその事業の幕を閉じた²。開業当初の売場は旧十一屋の店舗に集約し、旧三星の社屋は新聞社や旧郵政局へ賃貸していたが、いずれも1945(昭和20年)3月の空襲で大きな被

1 石川浩一「戦後の昭和：百貨店の美術部時代を思い出すままに」『芸術批評誌REAR』30号、リア制作室、2013年、45頁。

2 丸栄総合企画部編『丸栄三十年史』株式会社丸栄、1974年。丸栄五十年史編纂委員会編『丸栄50年のあゆみ』株式会社丸栄、1994年。

害を受けた。戦後は再び旧十一屋の店舗を本館として営業を再開したが、1946(昭和21)年8月には旧三星店舗の隣接地に新たな社屋(南館)を建設、翌1947(昭和22)年6月からは旧三星店舗を新装して本館として開店し、従来の本館を北館に改称、南館(別館とも呼称)を含め三館が並立した。この本館は当時珍しい1階中央天井吹き抜けを備え、2階中央天井には北川民次が18坪の大壁画を描



図1 北川民次による大壁画



図2 壁画制作中の東郷青児

いた[図1]。さらに1952(昭和27)年には村野藤吾の設計で本館を地上8階、地下2階、塔屋3階とする増築に着手、翌1953(昭和28)年に新装開店した(第一次増築)。この際東郷青児が7階大食堂の壁画を描き、またエレベーター扉絵の原画を制作している³[図2]。1956(昭和31)年、南館(別館)を解体して本館を増築、西側の基準階ファサードには村野藤吾によるモザイクタイル壁画があしらわれた(第二次増築)。その後、1973(昭和48)年に栄交差点南西角に栄開発ビルが竣工し、丸栄スカイルとしてオープン、1984年(昭和59年)に本館を増床した(第三次増築)。

	旧十一屋	旧三星	別館	栄開発ビル
1915(大正4)	十一屋開店			
1939(昭和14)		三星開店		
1943(昭和18)	合併、丸栄として営業	合併、賃貸		
1945(昭和20)	空襲で全焼	空襲で半焼		
	再建、本館として営業再開			
1946(昭和21)			新築、南館として開店	
1947(昭和22)	北館に改称	新装、本館として開店		
1953(昭和28)	閉館	第一次増築		
1954(昭和29)			別館に改称	
1955(昭和30)		第二次増築	閉館	
1956(昭和31)		本館として一体化		
1964(昭和39)	栄町ビル			
1973(昭和48)				スカイル開店(5-8階)
1984(昭和59)		第三次増築		
2010(平成22)				同館から撤退
2018(平成30)		閉館		

3 このエレベーター扉に関連すると思しき東郷の油彩《果物籠を持つ女》(JO201900022000)と、新装開店を記念するポスターの原画《女》(JO201900021000)も、2019年度に併せて愛知県美術館で受贈した。

丸栄の前身の一つである十一屋では、1921(大正10)年1月26日～30日に岸田劉生や木村莊八らが草土社展覧会を⁴、同年10月に椿貞雄が個展を開催しており、また1940(昭和15)年に7階催事場で美術文化名古屋展を開催するなど、戦前名古屋の展覧会場として存在感を示していたが、本稿で扱う受贈資料にはこの頃の記録は一切含まれていない。

丸栄となった1943(昭和18)年以降の画廊や催事場では、たとえば1946(昭和21)年の泰西名画展⁵や1947(昭和22)年の二科展⁶、1954(昭和29)年の第1回現代日本美術展、大口登個展、香月泰男個展、新制作展、清水六兵衛展⁷など、戦後名古屋のアートシーンにおける重要な展覧会場のひとつとして機能した。1958(昭和33)年の『愛知県文化会館ニュース窓口』によれば「丸栄画廊がその最初の形態をととのえたのは、昭和二十九年で北館から南館に移ったときだそうだが、次で全館完成の三十一年三月にはこれが倍に拡張され、同時に改装が行われて現在の姿となった」⁸[図3][図4]。たしかに1953(昭和28)年の第一次増築時の店内案内広告には本館6階に「画廊」の記載が見え、元来北館(旧十一屋)にあり体裁が定まらなかった画廊が、本館に移動したことが確認できる(『愛知県文化会館ニュース窓口』では「南館」とされるが誤記であろう)。また1956(昭和31)年第二次増築時の店内案内広告でも、6階店舗のラインナップに多少の変更はあるが、画廊は依然として本館6階にある。

さらに受贈資料のうち展覧会の案内状に記載された会場名を辿ると、その後1959(昭和34)年10月に本館5階に新設された大・小画廊が「5階画廊」と表記され⁹、その他「美術部ステージ」「中央画廊」「4階催事場」「4階特別室」「栄町ビル」(北館跡地、総合ビル)「柳橋ガーデンビル」(オフィスビル、2019年取り壊し)「マルエイハウジング5階特別会場」(矢場町に存在した分室)もしばしば展示会場となったことが窺えるが、名称や会場が一定せず、それぞれの規模や開設期間については詳らかでない。

さらに受贈資料のうち展覧会の案内状に記載された会場名を辿ると、その後1959(昭和34)年10月に本館5階に新設された大・小画廊が「5階画廊」と表記され⁹、その他「美術部ステージ」「中央画廊」「4階催事場」「4階特別室」「栄町ビル」(北館跡地、総合ビル)「柳橋ガーデンビル」(オフィスビル、2019年取り壊し)「マルエイハウジング5階特別会場」(矢場町に存在した分室)もしばしば展示会場となったことが窺えるが、名称や会場が一定せず、それぞれの規模や開設期間については詳らかでない。

1973(昭和48)年12月に本館東側にオープンした丸栄スカイルは、8階を美術フロアとし

1973(昭和48)年12月に本館東側にオープンした丸栄スカイルは、8階を美術フロアとし



図3 1956(昭和31)年頃の丸栄画廊



図4 1956(昭和31)年頃の丸栄画廊



図5 1973(昭和48)年頃のスカイル8階美術フロア

4 伊藤一男「岸田劉生・生誕百年 劉生と名古屋(其の一)」『郷土美術』36号、郷土美術研究会、1991年、ノンブルなし。名古屋地下鉄振興株式会社編『美術館&画廊 NAGOYA 1990』1990年。
 5 石川浩一「美術と出会い、後に百貨店の美術担当に」『C&D』139号、名古屋CDフォーラム、2005年、29頁。
 6 前掲『丸栄三十年史』1974年、前掲『丸栄50年のあゆみ』1994年。
 7 前掲『美術館&画廊 NAGOYA 1990』1990年。
 8 「画廊を訪ねて④丸栄・六階画廊」『愛知県文化会館ニュース窓口』37号、愛知県文化会館、1958年、8頁。
 9 前掲『丸栄三十年史』1974年、前掲『丸栄50年のあゆみ』1994年。

て大画廊・絵画サロン・工芸サロン、文化催場を割り当て、連絡通路で接続する本館8階を催事フロアとした[図5]。オープン記念「野の陶人 唐九郎展」は「そのスケールと内容から大いに話題とな」った¹⁰。

1984(昭和59)年10月の第三次増築時には、記念展として「桃山と唐九郎展」を開催している。その後1993(平成5)年3月にスカイル8階の大画廊を全面的に改装し[図6]、記念展として「会社設立50周年記念 加藤唐九郎名器20選展」を開催した。しかし2010(平成22)年11月のスカイル撤退に伴い、美術フロアも10月28日に本館に移転、2018(平成30)年の閉店まで本館8階で営業を続けた。



図6 1993(平成5)年頃のスカイル8階美術画廊

展覧会の傾向——川崎音蔵、三浦直彦、石川浩一

元丸栄百貨店専務・美術担当で、後にメナード美術館顧問も務めた石川浩一は、自身が勤める以前の丸栄画廊について次のように述べている。

特に、美術展では、松坂屋が日展、院展、青龍展……と日本画中心、丸栄が二科、一水会、新制作……と洋画中心で、何か棲み分けがあったように思う。特筆すべきは、昭和二十三年の丸栄における泰西名画展、セザンヌ、ゴッホ、モデリアニ、ただ今でも飛んで行きたくなる名画揃いで、狭い丸栄の地下会場にぎっしり詰め込まれていた。[中略]すべて県美術館ができる前の話である¹¹。

石川は1961(昭和36)年から丸栄美術課長職に就く。「荒川豊蔵と加藤唐九郎、陶芸界の両横綱ともいべきこのお二方の展観が一社で出来るのは全国で丸栄だけと自負していた。もちろん永年に亘る川崎さんの交友の賜物だが、この二人の展覧会を手掛けることが私の仕事の大きなウェイトを占めていた」¹²とその石川が振り返るように、画廊催事には陶磁器収集家としても著名な当時の丸栄社長・川崎音三が大いに手腕を発揮したようだ。川崎は「朝日陶芸展」



図7 1992(平成4)年「東海伝統工芸研究会」会場

10 石川、前掲記事、『芸術批評誌REAR』43頁。

11 石川、前掲記事、『C&D』2005年。

12 石川、前掲記事、『芸術批評誌REAR』42頁。

を主導し、「柏会展」「十和会展」「東山魁夷展」「唐招提寺障壁画展」「平山郁夫シルクロード展」「東海伝統工芸研究会」など陶芸分野のみならず幅広く催事を手がけている[図7]。

また特に絵画の分野については、東京銀座のサエグサ画廊の経営にも関わっていた三浦直彦の紹介で作家に声かけを行っていたという。文芸評論家の江藤淳の岳父でもある三浦は、1922(大正11)年に内務省入省、戦時は関東州庁長官の任を務め、公職追放後の1951(昭和26)年から57(昭和32)年にかけてサエグサ画廊の経営に携わった¹³。同期入省で後に愛知県知事となる桑原幹根とは絵画鑑賞趣味を通じて生涯親しく交わり、三浦は桑原に招かれ1957(昭和32)年から名古屋短期大学の学長を務めた。この三浦の人脈により、丸栄画廊は必然的に山口薫、森芳雄、麻生三郎、芝田米三、彼末宏、島田章三らサエグサ画廊の取り扱い作家を多く扱うことになる。ひいては「特に島田の展覧会の数が多く、ここでその頃私どもの一番の得意先であるメナードの化粧品オーナーとのご縁が出来、その後開館するメナード美術館と島田章三との関係に発展して行く」のである¹⁴。

13 塩谷昌弘「江藤淳(江藤淳夫)」「長谷川潔論」と岳父・三浦直彦『日本近代文学会北海道支部会報』13号、2010年。

14 石川、前掲記事、『芸術批評誌REAR』2013年。